# ばく通信 No.12

2020．6月　　特定非営利活動法人　発達障害児応援団 ＮＰＯばく

コロナ対応で始まった 2020 年度。ばくも静岡市の休校にあわせて、5 月末まで活動を休止しました。スタッフは電話、SNS、Zoom 等で子どもや保護者とかかわらせてもらいました。また、スタッフ同士の話し合いもライン等を活用し、総会はオンライン（Zoom）参加も併用しました。再開にあたっては、環境整備や消毒等工夫しました（ばくのホームページを見てください）。

NPOを開設して 12 年が経過しました。2020 年 6 月時点で支援をした子ども達は 167 人です。開設当時（2008 年）発達障害のある子どもの学習支援の場はほとんどありませんでした。学ぶ意欲をなくしていた子どもたちに分かる喜びを経験させたいと願って始めたNPOです。でも、最近は発達障害の学習支援を掲げる民間の塾や放課後等デイサービスが増えてきました。だから、ばくの存在意義は何だろうと考え、話し合うことが多かった 1 年です。

**★私たちが考えたこと**

**ばく**は、発達凸凹のある子どもが自分に合った学び方を知り、輝いていけるように力の積み上げを探っていく場所。保護者が子どもの今と未来に希望が持てるように一緒に考える場所。スタッフがそれぞれの特徴や家族事情を考慮しながら専門性を積み上げ、居心地がよく働ける場所。さらに、ここで得たものを発信して、他の支援職や次世代の支援職の力量アップを応援する場所…。コロナ対策で公的な援助（持続化給付金や休業保障等）がもらえない NPO であることを実感しましたが、自由な発想で運営が続けられる限りは続けていきたいと思います。2019 年度の企画をふりかえり、2020 年度の活動を充実させたいと思います。賛助会員の皆様の応援、ご意見をお待ちしています。

＜2019 年度企画＞

① **不登校支援事業**…在籍校の検討会に参加し、保護者や学校関係者から、ばくの指導について高い評価を得ました。感染防止とも相まって、Zoom を使ってのオンライン授業にもチャレンジしました。不登校児へのアプローチの手法として、外出による緊張や負荷を軽減し、学びを保証するという点では非常に効果的でしたが、個々の興味や考え方に合わせたスライドの準備は非常に時間を要しました。しかし、今後も様々な学びに対応していきたいと思います。

② **お勉強カフェ**…通級や支援級の先生や支援員等が参加し活気がある勉強会でした（6回実施）。守秘義務を徹底したクローズドな会であることが学びを深めたと感じます。インターネットを通じての参加希望もあることから、オープンな勉強会も企画する必要があると感じています。

③ **ほっとルーム**…ばくの修了生支援です。保護者との座談会や在室児との交流を図るボードゲームの会も行いました。今年も修了生の様々な情報が入ってきました。合格した…就職できた…でも…対人トラブル…山あり、谷ありの凸凹人生…あらためて、変わらないスタッフがいるばくの存在意義を感じています。今後も、修了生支援を続けていくことは重要と考えています。

④ **一般相談**…検査や相談が増加しています。2020 年度は**相談・カウンセリングの枠組み**に変更してニーズにこたえていきます。

2020 年 6 月現在

・入 室 児　　35 名（不定期指導 1 名を含む）

・スタッフ　　指導担当 13 名　相談担当 7 名　計 16 名（重複あり）

元教員　公認心理師　臨床発達心理士　臨床心理士　特別支援教育士　社会福祉士

**【活動報告】**

**A君（支援期間小 4～小 6）　ばくで培われたのは…地道に勉強する力・苦手にチャレンジする力**

ばくの卒業生（A君）とお母さんが、難関私立大学に合格したと報告に来てくれた。そして、「今の自分

があるのは、ばくのおかげ。自分は人と話すのが苦手。自分のやりたいことだけやればいいと思っていた。でも、ばくで苦手を克服した。椅子に座って地道に勉強することができた。学習の基礎を作ってくれた。」 お母さんからは「不安だったけど、いつも不安なことを一緒に考えてくれて、大丈夫といってくれたので、見守ることができた」とふり返ってくれた。

興味のある授業に時折参加する程度のマイペースな学び方だった児が、低学年のときには保護者の努力と担任の理解でなんとか適応していたのが、3年生になり、書くことが重要視されるなかで、自己評価が下がり、問題（登校渋り）が出現という典型例だった。しかし、そこから、医療機関を受診し、親が子どもの状況を理解。相談担当が親の不安に寄り添い、指導担当が興味を広げる教材の工夫を行なった（4年時：世界地図を広げて世界遺産さがし ，5年時：本児の好きな歴史上の人物を選び小論文を書く， 6年時：キング牧師の演説の動画を見て英文の意味理解とスピーチのコツを学ぶ等）。A君は興味のある教材をもとに苦手にチャレンジし続け、勤勉性を獲得していった。さらには自分の興味を追及して学びを深めていった。合格を一緒に祝うことができたのは支援職として幸せな時間だった。

**B 君（支援期間小4～小5）　学校での集団参加のカギは”自己理解“**

学校で悪目立ちする。集中が難しい。多弁。相手を意識した行動が苦手…という保護者の訴えのもと、自分の得意なことを生活にどのように生かせるのか、苦手なことはどうしたらうまくいくのかを考えながら、自分の**取り扱い説明書**を作成（改訂）することにした。①集中度の点数化 ②自分の特徴と解決策、周囲への要望 ③取り扱い説明書が上手に活用されていない場面をもとに日常生活の困り感を話し合う ④集中するための方略の確認 ⑤自分の主張を受け入れてもらう工夫 ⑥イライラのコントロール法等を取り入れて作った解説書で自分の長所と短所を知ることができるようになっていった。

4年時は自分を変えることなく相手に要求することが多かったが、5年時には自分はそう思わないが、相手にはいろいろな事情や気持ちがあることが理解できるようになってきた。相手に納得してもらうためにはどうしたら受け入れてもらえるのか、建設的な視点をもち、譲歩することも重要と気づくようになった。取扱説明書の作成を通じて、自分を知り、行動を変容させることができてきたことが学級集団での生きやすさにつながった。

**C さん（支援期間小2～小4）　メタ認知を高める指導と行動のコントロールの関連性**

「友達に一方的に関わる」「相手がイヤと言ってもやめられない」「衝動的に行動する」との主訴で2年時に入室した本児を4年生の一年間指導した。4月当初は明るく人懐こいが衝動性の高さと一方的な会話、乱暴な言葉遣いが目立っていたため、①自分の言動を振り返る ②身だしなみについて知り自分を振り返る ③小集団で行動をコントロールすることができるという目標を立てた。①では自分のことを話題にして相談すると辛いようだったため、他者の悩みを共有するという方法で「悩み相談室」という方法をとると、「これ私と同じ」と言いながら自分の言動を振り返ることができた。②の身だしなみについては、親しみやすいネーミングとして「女子力アップ大作戦～キラキラ C ちゃんを目指そう～」を合言葉に指導開始に決められた項目をチェックすることにして、次第に自らチェックすることができてきた。③では、個別に指導者がよくない見本を行い、本児が正しいお手本を行うというようにロールプレイングを行った。実際に相手の話を黙って聞く、譲る、我慢する等できてきた。

しかし、学年途中で転校することになり、環境が大きく変わることへの保護者と本人の不安が大きかったため、ばくでの指導の様子を学校に伝える等の情報共有を行った。学校の協力や医療との連携も効果をあげ、C さんは転校先の学校で行動をコントロールしながら安定して学校で過ごせるようになった。環境の変化が大きい時期、支援のネットワークが効果をあげることを学ばせていただいた。

★なお、事例報告は保護者の同意を得て掲載している。

静岡県静岡市駿河区大和 2 丁目 6 番 5 号　東京堂ビル 305 号
電話・FAX：054-266-5616（火～金曜日　15 時～19 時 30 分）
**賛助会費振込先**：郵便口座番号 00810-6-134767　　発達障害児応援団ＮＰＯばく
（一口 1000 円、何口でも）
E-mail:baku@orion.ocn.ne.jp　　URL：http://www.npobaku.sakura.ne.jp